

随想 なま 生人参の味 — 私の岡山空襲体験 —

金馬 京子

私は泣くまいと唇をかみしめ、必死で走っていた。

それは、京子がやっと一二歳になったばかりの昭和二〇年六月二十九日、未明のことであった。突然、岡山全市が大空襲を受けたのである。

その時、祖母と京子は疎開先の小屋の裏の竹藪に近所の人達と身をひそめて、はるか岡山あたりの空が炎で真っ赤に染まり、舞い上がる火の粉と赤く光る灰が黄金を散りばめたように見えるのを呆然と眺めながら、頭上をゆきかうB29の恐ろしい爆音にふるえていたのだった。

竹藪の中にも焼夷弾が落ちて燃え始めた。誰か二、三人で消したようだが、京子は昨日祖父が岡山市内の家に大八車をひいて残った家財道具をとりに行ったまま帰らないのが気がかりで、自分のこわさは忘れていた。

空が白みはじめたので、京子は祖母に頼んでなければなしの米を炊いてつくってもらった握り飯を風呂敷で腰にくくりつけ、一〇キロの道を岡山まで祖父をさがしにと今、ひた走っているのだ。

幼い頃から母の両親である祖父母に育てられたので、京子にとっては親より大事な祖父のことが心配で心配で、気だけ焦るが道はなかなかかどってくれない。疎開先から岡山市内の山陽女学校に通学のため利用していた汽車の線路づたいに行くしか道を知らない。あたりは田圃と畠ばかりで道を聞く家もない。

ただ、雨まじりの空を焦がしている炎が猛り舞い、煙が広範囲に盛大にたなびくのがすぐ近くのようによく見えるので、岡山市への方角は間違えようがなかった。

B29が市内を壊滅状態にして飛び去ってまだ、ほんの六、七時間しかたっていない。

京子は小柄な体でころがるように走りに走った。あえぎながらも道を急ぎ、たどり着いたときは全身汗だくであった。

白い運動靴も泥だらけである。田や畠が途切れて街中に入るあたりで、ほとんど原形をとどめないまま、くすぶりつづけるパン屋や食料品店、民家など。そして道のあちこちに死体が散乱している。所々にまとめて、三体五体と積み

重ねてある。京子は思わず身震いした。

空気はまだ焼けるように熱く、火葬場と同じ。しかしもつとすごい臭気があたり一面にたちこめ、息がつまりそうになる。まだ燃えている通りが多く、まわり中が火の海の名残りをとどめていた。

ふだんはこわがりの京子であったが、必死で積み上げてある死者の頬を手で向きを変えては一人ひとり顔をたしかめながら歩いた。死体はおびただしい数である。しかし、その中に祖父はいなかった。

街中に累々と死体が横たわっていた。押し潰されたか、頭や手足がなかったり、焼け焦げて顔が分からないほどの無残さ、この人達はみんな、昨日まで自分と同じように笑ったり歩いたり元気でいたのに……。悲しかった。

また、火傷だらけの人達、怪我をした人達が衣服ともいえないものを身にまとって、うめき、わめいたり、すすり泣き、右往左往している。焦げた足を引きずってないでいる犬もいた。まさに阿鼻叫喚の地獄絵だ。

建物は皆焼けくずれ、車は炎にのみこまれ、焼け残った家々はくすぶりつづけていた。まだ燃えている家もあちこちにあるので、その中を歩く京子の運動靴もくすぶって、焼けたゴムの臭い匂いがした。何ヶ所も穴があいていたが、ぬぐわけにいかない。今度は足に火傷をすると困る。

岡山全市が端から端まで見通せた。

これで京子は何十人の死に顔を調べただろうか。しかし祖父は見当たらない。足の悪い祖父が逃げきれたとは思えない。京子は小さい胸を痛めながら探しまわった。

そのうち全く方向がわからなくなった。頭がズギズキしてきて、自分が出口のない迷路に迷いこんだみたいで酔ったようにフラフラ歩いたが、しだいに呼吸が浅く速くなってきた。

今、いったい何時頃なんだろう。親や子ども、兄弟を探して歩き回る人達に押され、大切に腰にくくりつけていた弁当もいつか失っていた。

煙で喉が焼けつくように痛む。ついに運動靴がやぶれて足が火ぶくれて悲鳴をあげた。焼け残りの木を折って杖にして、もしや祖父ではないかとまた死者の顔をのぞいて回る。

感覚が麻痺しているのか気味が悪いとも思わなくなっていた。このあたりは全部探した。やはり祖父はいない。がっかりとして、しゃがみこんでしまった京子を被災者と思つたらしい見知らぬおじさんが、

「小学校の焼け跡で炊き出しをしとるよ」と教えてくれた。

人の流れに乗って、ほとんど崩れた小学校の校庭でおにぎりとお茶をもらった。

(へエ、全部お米だ！)

京子はたった一つのおにぎりにむさぼりついた。涙が出るほど、おいしかった。何も入って

いない塩味だけのおにぎり。減るのが惜しくてゆつくり食べた。指までしゃぶった。

疎開先では毎日、顔が映るような、シジミが入っていると思つたら自分の目だったという笑い話そのままの粥に、近所の雑草を抜いてまぜた雑炊しかずつと食べていかなかったもの。

おにぎりを食べると少しは元気が出た。くたくたの体をひきずって、またあちこちを探すうちに、陽が西に傾きはじめてきた。早く帰らないと祖母が心配するだろう。

同じ方向へ歩く罹災者の何人かの後から、京子はやさしかった祖父を失った悲しみを抱いてトボトボと歩く。皆、おし黙って重い足をひきずっていた。

やつと道のりの半分ほど帰った所で、何人かの人が畠の大根をみつけて、破裂した水道管から噴き出す水で洗ってかじっていた。

京子も真似ようとしたが、大根はもうなくなっていて人參しかなかった。一番小さいのを引き抜き、洗って、遅れないように足をひきずりながら、祖父を見出せなかった悔し涙と一緒に、生まれて始めて生の人參をかじった。生臭いよな、にがいとも甘いとも何ともいえない味だ。でもお腹はすいている。えずきながらも一本食べてしまっていた。

気がつくとい人ぼつちで歩いていた。杖にすがるように痛む足をかばいながら、さつきどこかのおじさんに、

「財田村(さいでんそん)は、あっちの方じゃ」と教えてもらった方角に向かった。

長い道のりだった。あたりはもう暗いが足元の道はまだほんのり見える。誰一人歩いていない。またフラフラと歩く。もう、このまま倒れて道で寝たいと思いがら、また歩く。

やつと、やつと村の入り口の大きな木が見えてきた。座り込みたいのをこらえて杖にすがり、血豆と火傷の足をかばいながら一歩一歩、よるめくように進んだ。祖母に何と言おう。重い心を抱いて家の手前の曲り角まで来た。誰かが立っている。

「お、おじいちゃん」  
夕闇のなかにこちらを向いて立っているのはまぎれもなく祖父であった。

祖父が、祖父が生きていた。  
まるで夢のようだった。京子は泣きながら祖父の胸にとびこんだ。

「おう、おう、帰って来たか。やれやれ、よかった。けど、まるでお前の方が焼け出されたような格好じゃな……」

笑みを含んだ祖父の頬にも涙がたつた。大きな手のひらで京子の頭をなでた。

どうも行き違いになったらしい。線路伝いに歩くより他の道を知らない京子は半分遠回りしたようだ。

祖父は昼ごろに体ひとつで帰りついたらしいが、やはり怪我と火傷をしていた。

また行き違いになってはと、京子を家で待っていたのだが、日が暮れてきて矢も盾もたまらず迎えに行こうとしていたところだったという。

「まあ、二人とも無事でよかった。これも信心のおかげじゃ。ありがたい、ありがたい」

祖母はお礼のお経をあげだした。

火ぶくれと血豆の無残な京子の足を見て祖父は、「これで、よう歩けたもんじゃ」

と声をつまらず。急いで脱いだ服を見ると焼け焦げだらけで、おまけに何度もころんだので頭も顔も泥とすずで真つ黒だ。仕上げに涙で練っている。見られたものではない。京子は鏡を見て吹き出した。

井戸水で手や顔を洗ってやっと人心地がついた京子は祖母の作った雑炊に舌づつみをつた。その夜は空襲の話でもちきり、なかなか寝付けなかった。長い長い一日であった。

京子には生まれて始めての大冒険の日であるとともに、戦争のむごたらしさを永久に心に焼きつけた日でもあった。そして生きていることの有難さをしみじみと実感した日でもあった。

（京子は大好物だった人参を、あれ以来、半世紀ちかくも、まったく食べられなくなっていたのである）

それから、わずか二ヶ月たらずで終戦となった。京子はまた、少し大人になった。

## 注

・ 焼けた疎開前の住所：岡山市野田屋町二二二番地

・ 疎開先：上道郡財田村字長利

## お便り

毎日の尊い御活動ほんとうにご苦勞様でございます。

この原稿は、一〇年近く前に「生人参の味」と題して、主人公は「ユキ」と名付けて書いて箱に入れたままでした。

あの異常な体験を誰かに語り伝えたい、「戦争はこんなに悲惨なものだ」という事実を話し聞かす我が子もなく、だんだん年齢を重ね、このまま忘れてしまわぬうちにせひとも書いておかなければ……と、何かにつき動かされる思いで、文章の綴り方さえ知らない私が文章教室へ通って書いたものです。なのにそのまま月日が流れ

不思議な偶然ですが古い新聞が手に入り、こうしてこの原稿がお目にとまる時が参りました。「ユキ」を本名に書き直し、副題をつけ加えました。リニューマチの指が思うように動いてくれず、時間ばかりかかり遅くなってしまいました。

もしかすると、この原稿用紙一〇枚のためにこそ、私は生まれて生きてきたのかも判りません。生きてきたあかし、後の世の人のため、たとえ耳かき一杯くらいでも、お役に立つために、生まれてきたのかもと思うと、とても嬉しいです。

永遠の平和のため、お体をくれぐれもお大切に、御活動くださいますことを切に祈っております。

(二〇〇六月九月一八日)

(こんま きょうこ)